

特別展 文明の十字路 バーミヤン大仏の太陽神と

ガンダーラから日本へ 弥勒（みろく）信仰

三井記念美術館（日本橋） 2024.09.14～11.12



「バーミヤン遺跡」は、アフガニスタン中央部を東西に走るヒンドークシュ山脈の中にあり、この地域は古くからユーラシア各地の文化が行き交ることから「文明の十字路」とも呼ばれている。

ここの渓谷の崖に石窟が掘られていて、その中に東西に対の大仏が聳えて、周囲壁面には「太陽神」と「弥勒」の姿が描かれている。

本展は、東西2体の大仏を原点とする「未来仏」である弥勒信仰の流れを、「インド・ガンダーラの彫刻」と日本の法隆寺など奈良の古寺をはじめ、各所に伝わる「仏像、仏画の名品」でたどるものである。

『弥勒菩薩立像』 13世紀・鎌倉時代 チラシ中央上図の像



『バーミヤン東大仏龕天井壁画 描き起こし図

(部分)』 正垣雅子筆 2022年

バーミヤンの大仏と壁画は、2001年3月にイスラム原理主義組織・タリバンによって破壊された。

しかし、破壊以前に行われた調査時のスケッチと写真によって、再現図が『壁画の巻き起こし図』が新たに完成されて、このたび初公開されていることで注目されている。

「弥勒信仰（みろくしんこう）」とは、インドで成立して東南アジア・東アジアの諸民族に受容されたもので、中国・朝鮮半島を経て6世紀末に日本に伝来して、民族信仰となり特に奈良時代に発展して盛んになった。

その後、平安時代後期以降も未来仏である「弥勒信仰」は、一層の高まりを見せ、上生・下生信仰の他、密教や阿弥陀信仰とも関連を持ち展開をした。

本展では、こうした日本の「弥勒信仰」を背景に生み出された「仏像」や「絵画」などを通じて、さまざまな日本の「弥勒信仰」の姿を閲覧できる。